

4/16 Wed.

第681回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.681 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Guest Concertmaster

ブラームス
BRAHMS

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

オクサーナ・リーニフ *-p.5*
OKSANA LYNIV
ルーカス・ゲニューシャス *-p.7*
LUKAS GENIUŠAS
小川響子 (ゲスト)
KYOKO OGAWA

ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15 [約44分] *-p.10*
Piano Concerto No. 1 in D minor, op. 15
I. Maestoso
II. Adagio
III. Rondo: Allegro non troppo

交響曲 第5番 八短調 作品67 (運命) [約31分] *-p.11*
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

4/21 Mon.

第647回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.647 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
第1コンサートマスター
First Concertmaster

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

[休憩]
[Intermission]

ボーダナ・フロリャク
BOHDANA FROLYAK

バルトーク
BARTÓK

オクサーナ・リーニフ *-p.5*
OKSANA LYNIV
ヤメン・サーディ *-p.7*
YAMEN SAADI
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77 [約39分] *-p.12*
Violin Concerto No. 1 in A minor, op. 77
I. Nocturne
II. Scherzo
III. Passacaglia
IV. Burlesque

光あれ [約9分] *-p.13*
Let There Be Light

組曲 (中国の不思議な役人) [約20分] *-p.14*
Suite "The Miraculous Mandarin"
第1曲 「導入」
第2曲 「第1の誘惑」
第3曲 「第2の誘惑」
第4曲 「第3の誘惑」
第5曲 「少女の踊り」
第6曲 「役人の猛追」

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協賛：大成建設株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

4/26 Sat.

第276回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 276 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

4/27 Sun.

第276回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 276 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

木嶋真優 -p.8
MAYU KISHIMA

戸原 直
NAO TOHARA

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] -p.16
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36 [約44分] -p.17
Symphony No. 4 in F minor, op. 36
I. Andante sostenuto – Moderato con anima
II. Andantino in modo di canzona
III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
IV. Finale: Allegro con fuoco

指揮
オクサーナ・リーニフ
OKSANA LYNIIV, Conductor



©Serhiy Horobets

欧州で注目のマエストラ 読響に鮮烈デビュー

バイロイト音楽祭初の女性指揮者で、ボローニャ歌劇場の音楽監督を務めるリーニフが、ベートーヴェン〈運命〉やバルトーク〈中国の不思議な役人〉などでオペラに長けた手腕を発揮し、作品の神髄へと迫る。

ウクライナ出身。故郷のリヴィウとドレスデンで学び、その後ウクライナ国立オペラ歌劇場の副首席指揮者を務めた。2013～17年はミュンヘンのバイエルン国立歌劇場で音楽総監督キリル・ペトレンコのもとで音楽アシスタントを務め、14年には〈皇帝ティートの慈悲〉を指揮し同歌劇場にデビュー。その後もミュンヘン・オペラ・フェスティバルなどで〈ランメルモールのルチア〉や〈ナクソス島のアリアドネ〉、〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉などを指揮。17年～20年までグラーツ歌劇場およびグラーツ・フィルハーモニー管の首席指揮者を務め、22年にはボローニャ歌劇場の音楽監督に就任。21年にはバイロイト音楽祭初の女性指揮者としてデビューし、24年まで〈さまよえるオランダ人〉を指揮。24年2月にはメトロポリタン歌劇場にデビューし成功を収め、25年2月にはザルツブルクの「モーツァルト週間」でウィーン・フィルと共演、好評を博した。これまでにミュンヘン・フィル、ウィーン響、バイエルン放送響、ベルリン・ドイツ響、ロンドン・フィル、バーミンガム市響などに客演するほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座、ローマ歌劇場などで活躍。今年4月には「東京・春・音楽祭」で読響と〈蝶々夫人〉で初共演する。

4/16
名曲

4/21
定期

Maestro

4/26

土曜マチネー

4/27

日曜マチネー

Maestro

指揮

小林研一郎
(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

“炎のコバケン”が
チャイコフスキーで
渾身のタクト!

©読響

“コバケン”の愛称で親しまれ、絶大な人気を集める名匠・小林研一郎が、得意のチャイコフスキーなどを振り、エネルギーみなぎるタクトで会場を深い感動に包み込む。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々の楽団のポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれ、スメタナ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏して絶賛された。ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章(同国で最高位)などを授与された。国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞などを受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル、名古屋フィルおよび群馬響の桂冠指揮者、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授、ロームミュージックファンデーション評議員などを務めている。オクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリース。著書には『指揮者のひとりごと』(日本図書協会選定図書)などがある。社会貢献活動として「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を2005年に設立、国内各地で活動が続いている。2011年から読響特別客演指揮者を務めており、数々の名演を残している。<https://maestro-kobaken.com/>



©Sylvain Gripoix

ピアノ

**ルーカス・
ゲニューシャス**

LUKAS GENIUŠAS, Piano

欧米で注目を浴びるピアノの神器。1990年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院の教授であった祖母ゴルノスターエワから影響を受ける。バックウアー国際コンクール優勝。2010年のショパン国際コンクールと15年のチャイコフスキー国際コンクールで第2位。プレトニョフ、スラットキン、サロネン、ソヒエフらの指揮で、パリ管、フランス放送フィル、バーミンガム市響、フィラデルフィア管、モントリオール響などと共演。ザルツブルク音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭、ラ・ロック・ダンテロン音楽祭、ロッケンハウス音楽祭などに出演。レパートリーはベートーヴェンからヒンデミットまで幅広い。メロディア・レーベルなどからCDをリリースしており、ディアパソン・ドール賞などに輝いている。読響とは23年10月以来、2度目の共演。

2022年に25歳の若さでウィーン国立歌劇場管のコンサートマスターとなり、ウィーン・フィルのコンサートマスターに新たに就任する新星。ソリストとしてバレンボイム、カヴァコス、ポッペンらの指揮で、ベルリン国立歌劇場管、イスラエル・フィル、ヨーロッパ室内管、ポーランド国立放送響、バレンシア管、クレメラータ・バルティカなどと共演。カーネギーホール、ラインガウ音楽祭などで演奏した。イスラエルのナザレ生まれ、同地のバレンボイム=サイド音楽院でヴァイオリンを学び、11歳でウェスト=イースタン・ディヴァン管に入団、17歳で同団のコンサートマスターに就任。クロンベルク・アカデミーで修士号を取得。使用楽器は、クライスラーが9年間弾いた銘器、1734年製のストラディヴァリウス「ロード・アマースト・オブ・ハックニー」。



ヴァイオリン

ヤメン・サーディ

YAMEN SAADI, Violin

4/16

名曲

Artist

4/21

定期

Artist

4/26

土曜マチネー

4/27

日曜マチネー

Artist



©Kazumi Kurigami

ヴァイオリン

木嶋真優

MAYU KISHIMA, Violin

豊富なメディア出演で人気を呼び、卓越した演奏で高い評価を得ている実力派ヴァイオリニスト。近年はブルーノート東京でライブを行うなど、幅広い活動を展開している。2016年上海アイザック・スターン国際コンクール優勝。00年ヴェニヤフスキ国際コンクール・ジュニア部門で日本人として最年少で最高位を受賞。11年ケルン国際音楽コンクールに優勝し、D.ギャレット賞も受賞。15年秋にはケルン音楽大学大学院を満場一致の首席で卒業、ドイツの国家演奏家資格を取得。24年にキングレコードからCD「Dear」をリリースし好評を博している。使用楽器はNPO法人イエロー・エンジェル、宗次コレクションから特別に貸与された1699年製ストラディヴァリウス「ウォルナー」。読響とは2004年の《三大協奏曲》以降、共演を重ねている。

ブラームス

ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15

ヨハネス・ブラームス(1833~97)は、常に自分の創作に厳しい目を向けていた。特に若い頃は、作品を書き上げてそれで終わりにはせず、補筆や改訂を重ね、ときには破棄してしまうこともあった。ピアノ協奏曲第1番も例外ではなく、方向性がなかなか定まらず、何度となく改訂が繰り返された。

1854年春、ブラームスは、3楽章から成る〈2台のピアノのためのソナタ〉の作曲を開始した。次にこれを交響曲に改作することを考えたが、ピアノ協奏曲へと変更し、シューマンの妻クララや親友のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムから助言を受けて推敲を重ね、58年ようやく試演までこぎつけた。翌年のブラームス自身のピアノ独奏、ヨアヒムの指揮による初演はまずまずの成果を収めたが、ライブツィヒで演奏された際には聴衆から好意的な反応を得ることはできなかった。20代前半の青年のひたむきさと情熱に満ちた作品だが、高度な演奏技術が必要とするものの、ピアノの技巧が際立つヴィルトゥオーゾ的な協奏曲ではなく、シューマンのピアノ協奏曲のようにオーケストラとピアノが対等なシンフォニックな協奏曲でもなく、後のチャイコフスキーのような華やかさも異なり、なかなか理解されなかった。それでもブラームスは、楽譜が出版されるまで第1楽章を中心に補筆・修正を行った。

第1楽章 マエストーソ 管弦楽の堂々とした主題の提示に続き、ピアノが表情豊かな旋律から巧妙につなげて第1主題を奏する。憧れに満ちた第2主題はピアノのみで示される。二つの主題が展開され、ピアノは後半になるに従って活発になる。

第2楽章 アダージョ 管弦楽とピアノの美しい対話が続ぎ、音楽は微妙に色合いを変化させる。最後はピアノのカデンツァを経て静かに結ばれる。

第3楽章 ロンド アレグロ・ノン・トロppo ピアノによるエネルギー感あふれるロンド主題で始まる。新しい主題のほか、管弦楽を対位的に扱う部分や「幻想曲風に」と指示されたピアノのカデンツァが盛り込まれるなど豊かな内容をもつ。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1854~58年／初演：1859年1月22日、ハノーファー／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

交響曲 第5番 八短調 作品67〈運命〉

楽曲冒頭の4つの音から成る動機についてルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)が「運命はこのように扉をたたく」と語ったという逸話から、交響曲第5番は「運命」の通称で親しまれているが、今日ではこれは弟子のシンドラーの作り話とする説が有力である。

第5番は、断片的なスケッチこそ交響曲第3番〈英雄〉完成直後の1804年頃から見られるが、実際の作曲は、07年から翌年にかけて行われた。1802年に精神的な危機を克服して以来、個性的な傑作の数々が生み出されたが、第5番は、同時に手がけた第6番〈田園〉とともに、そのひとつの到達点といえるだろう。

第5番は、強烈な印象を残す「運命動機」が様々なかたちで各楽章に現れ、交響曲全体を統一する。後半の二つの楽章は切れ目なく演奏され、「闇から光へ」という勝利に至る道筋が音楽で強調された。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 運命の動機がたたみかける第1主題とホルンの導入を経て現れる穏やかな第2主題が示され、緊迫した音楽が展開される。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート まずは中低音で主要主題が優しく歌われ、力強い経過主題が示されたのち、主題が装飾的に変奏される。変奏で展開される際も低弦部に運命の動機のリズムが静かに、しかし持続的に刻まれる。

第3楽章 アレグロ 低音楽器の弱音から湧き上がる主題とホルンによる運命動機の変形を用いたスケルツォ楽章。歯切れの良い中間部をはさむ。終結移行部は最弱音で進められ、ティンパニの連打とともに巨大なクレシェンドで高まる。

第4楽章 アレグロ 短調から長調へと移り、ベートーヴェンの交響曲で初めて3本のトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが採用された。力強い第1主題と運命動機に由来する第2主題が示される。展開部で第3楽章の主題が現れ、一瞬、過去の闇を回想するが、最後は長大なコーダで全曲を堂々と締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1807~08年、初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ショスタコーヴィチ ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77

「音楽ならざる荒唐無稽」から12年、ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）の喉元には新たな刃が突きつけられていた。しかしそれがナマクラであることを、作曲家は見抜いていた節がある。

オペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を、ブラウダ紙で「荒唐無稽」と批判されたのが1936年。このたび作曲家に向けられた剣は「ジダーノフ批判」だ。1948年1月6日、レニングラードの共産党書記ジダーノフが、ショスタコーヴィチらの創作活動を「音楽言語の意図的な複雑化」と断じて糾弾した。

ところが、同年4月に催された全ソヴィエト作曲家大会での参加者による総括を経て、早くも翌月、批判の対象となった音楽家らの名誉回復が始まる。「批判」を仕掛けたジダーノフが、梯子を外されたかたちだ。

こうした嵐の中、ショスタコーヴィチはヴァイオリン協奏曲第1番を書き上げた。この作品は社会主義リアリズムの理想からは遠く、(当局の言葉を借りればまさに)「形式主義的」とされてもおかしくない。刃を向けられた状態で書くには、いささか無鉄砲な仕上がりである。それでも構わないと作曲家が思えたのは、「ブラウダ批判」とは違い「ジダーノフ批判」にはどこか緩さを感じたからではなかろうか(ただし、初演は7年後になってしまった)。

作品は4楽章制。第1楽章は「夜想曲」で、半音階ぎみの旋律が瞑想的な雰囲気を出す。中間部でそれは十二音技法の体裁を取るにいたる。「スケルツォ」の第2楽章は快活だが、民族主義的な響きは聴かれない。第3楽章には「パッサカリア」を配する。長大なカデンツァには作曲家のイニシャルを音名で読み替えた「DSCH(ニ・変ホ・ハ・ロ)」音型がちりばめられている。「ブルレスケ」とされた第4楽章は、副題通りおどけた調子の騒々しい音楽。終盤、遠くに「パッサカリア」を響かせながら、音楽は一気呵成に走り抜ける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1947～48年／初演：1955年10月29日、レニングラード／演奏時間：約39分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（シロフォン、タンブリン、銅鑼）、ハープ2、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ボーダナ・フロリャク 光あれ

1968年は東欧が「プラハの春」に揺れた年である。年頭にドゥプチェクがチェコスロヴァキア共和国共産党第1書記へと昇任したことに端を発し、同国で政治的・経済的自由の萌芽が生じた。この民主化運動を無惨にも踏みつけにしたのが、ソヴィエト連邦を盟主とするワルシャワ条約機構軍だ。8月20日深夜、4カ国からなる50万人規模の軍隊がチェコスロヴァキアの国土を占領した。

この年の6月、当時、ソヴィエト連邦の一部であったウクライナでボーダナ・フロリャク（1968～）は産声を上げた。このときはウクライナも、チェコスロヴァキアへの軍事侵攻に兵を派遣していたはずだ。そのウクライナも2014年および22年には、1968年のチェコスロヴァキアの境涯を知ることとなる。そこに世界史の悲しさ、残酷さがにじむ。フロリャクはまさにそのうねる世界史を生き、創作を積み重ねてきた。

作曲家は故国のリヴィウ音楽院と、ポーランドのクラクフ音楽アカデミーとで学び、2000年ごろからさかんに作品を発表している。作品は交響曲や協奏曲といった伝統的な器楽ジャンルに属するものが多い。一方、詩的なタイトルを持つ声楽曲も目立つ。興味深いのはキリスト教に題材を取る作品が含まれること。「詩篇」などの『聖書』の言葉、「キリエ」や「アニュス・デイ」といった典礼の詞章を用いる。

フロリャクはジャンルとしての管弦楽曲に、『聖書』の「創世記」の言葉を掛け合わせてひとつの交響詩、オーケストラのための〈光あれ〉を書き上げた。

ハーブの撥弦と弦楽器のトレモロで曲の口火を切る。オーボエに音程を広く上下するテーマが出ると、それを他パートが次々と受け継いでいく。地鳴りのようなサウンドの中、狭い音程でぶつかり合う不協和音が鳴り響く。穏やかな楽想と地鳴りが入れ替わりつつ進むと、オーケストレーションは徐々に薄くなり、最後は消え入るように曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2023年／初演：2023年7月14日、ロンドン／演奏時間：約9分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、サスペンデッド・シンバル、ヴィブラフォン、チューブラーベル、ウインドチャイム、銅鑼）、ハープ、弦五部

バルトーク 組曲〈中国の不思議な役人〉

1918年秋、オーストリア=ハンガリー二重帝国が崩壊した。東はチェルニウツィ(現ウクライナ西部)から西はブレゲンツ(現オーストリア西部)まで、北はプラハ(現チェコ)から南はサラエヴォ(現ボスニア・ヘルツェゴヴィナ)までを有する巨大帝国も、その終わりはあっけなかった。

ハンガリーでは第1次革命を経て、カーロイがブルジョワ民主主義共和国を打ち立てる。19年早春には第2次革命により、社会主義国家ハンガリー・タチーナ(ソヴィエト)共和国が建ち上がった。しかし、同年夏には反動勢力が権力を握り、翌年にかけて粛清の嵐が吹き荒れる。1920年3月、まやかしの国民投票によりハンガリーは王国に復帰した。

当時、多くの音楽家がそうであったように、ベラ・バルトーク(1881~1945)もまた、革命統治評議会の音楽委員会に公職を得た。国立博物館内に民俗音楽研究部門を設置しようと画策するも、評議会の崩壊によってそれを断念。以後は当然、反革命運動によってパージされることになる。

しかし、バルトークにとってそういった動乱は、創作や研究に比べれば大した意味を持たなかった。実際、反動勢力が実権を握った19年夏、ルーマニア軍に自宅を占拠されたバルトークは、モルドヴァ地域出身のハンガリー系兵士を見つけ、彼らから民謡を採集したという。緊迫した場面が一転、音楽研究者にとっては格好の草刈り場となったのだ。

こうした史実と後述の創作史とに鑑みると、社会状況が〈中国の不思議な役人〉の作曲の筆を妨げることはなかったように見える。しかし、そんな社会状況ゆえ、この作品の初演はずいぶん遅れてしまう。バルトークがこの作品のピアノ・スコアを書き上げたのは、革命の熱を反動の波が冷まさんとする1919年だったが、オーケストレーションを終え初演を迎えるには、さらに7年の歳月を必要とした。

同作品はパントマイムのための付随音楽。1916年にメニヘールト・レンジェルが原作を執筆、翌17年年頭号の文芸誌上でこれを発表した。バルトークの恩師イシュトヴァーン・トーマンが、かつての教え子にこの原作を紹介し、作曲を勧めたのが18年。バルトークはその後、物騒な世相の中、創作の筆を走らせた。

1926年冬の初演からほどなくして作曲家は、全曲を整理(ほぼ抜粋)し新たに終結部を加えた上で、「これまで書いた中でもっとも優れた管弦楽曲」として、組曲〈中国の不思議な役人〉を世に送り出す。26年の舞台初演を大失敗で終えたバルトークが、なんとかこの作品を聴いてもらおうと、内容の点でけちがついた物語の最後(暴力・殺人・倒錯・恍惚)を削除し、視覚情報(パントマイム)を伴わない体裁に作り替えたということだろう。

第1曲「導入」 騒々しい街を表すようなざわめく音型と、強烈な不協和音程(三全音)が耳を引く。以後、物語の“軋み”^{まじ}を象徴するサウンドとして、この不協和音程がたびたび顔を出す。

第2曲「第1の誘惑」 クラリネットがしゃくりあげるような音型で少女の客引きを示し、トロンボーンやイングリッシュ・ホルンが老人となってそれに応える。老人は文無しだったので、ならず者たちに追い出されてしまう。

第3曲「第2の誘惑」 少女は次に青年を誘う。クラリネットの誘惑はピアノを伴って勢いを増す。それに青年役のオーボエが応答する。青年もならず者に追い出される。

第4曲「第3の誘惑」 ピアノとハープを味方につけ、少女は挑発をエスカレートさせる。3人目のカモは中国の役人である。役人は東洋的な五音音階に乗って登場する。

第5曲「少女の踊り」 役人とのおずおずとしたやりとりを経て、少女がワルツを踊り出す。音色を増し加えながら、音量や音圧も高めていく。それを目の当たりにした役人の興奮とともに、前曲の五音音階の楽句が速いテンポで戻ってくる。

第6曲「役人の猛追」 荒々しい2拍子に乗って、役人が少女を執拗^{しつよう}に追い回す。役人はつまずいて転倒するもすぐに起き上がり、目の色を変えて少女を追いかける。その勢いは増していく。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲:1918~1927年/初演:1926年11月27日、ケルン(全曲)、1928年10月14日、ブダペスト(組曲)/演奏時間:約20分

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(エスクラリネット、バスクラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、サスベンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼、シロフォン)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、オルガン、弦五部

4/26

土曜マチネー

4/27

日曜マチネー

Program Notes

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

「ホ短調の協奏曲が頭のなかを駆け巡り、その冒頭に私の心は休まることがありません」。1838年7月、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）はライブツィヒ・ゲヴァントハウス管のコンサートマスターで、作品の初演者となるフェルディナント・ダーヴィトに宛てて、こう記している。ヴァイオリン協奏曲のあの有名な冒頭の旋律はすでにこの時点で作曲家の頭のなかにあったのだろう。しかし、ここから作曲の筆は遅々として進まず、6年後の1844年になってようやく完成に至った。ダーヴィトからは演奏技術上の助言を受けている。

メンデルスゾーンに師事し、早くからこの作品に親しんだ歴史的な大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムは、後に作品についてこのように述べて、その性格を巧みに言い表した。

「ドイツ人は4つのヴァイオリン協奏曲を持っている。もっとも偉大で妥協のないのはベートーヴェン。ブラームスの作品も誠実さでベートーヴェンに匹敵する。もっとも豊麗で魅惑的なのはブルッフ。しかし、もっとも内面的な、心の宝石というべき作品はメンデルスゾーンだ」

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッシオナート 短い伴奏に続いて、すぐに独奏ヴァイオリンが主題を提示する。カデンツァが展開部と再現部の間に置かれる。

第2楽章 アンダンテ 前楽章からファゴットの持続音を引き継いで幻想的に始まり、独奏ヴァイオリンが陰影に富んだ旋律を奏でる。中間部は愁いを帯びる。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロppo～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 第2楽章の中間部の主題にもとづく短い連結部で始まり、すぐに快活な主部に入る。弾むようなファンファーレに続き、独奏ヴァイオリンが小気味よく軽快な主題を奏でる。華やかな名技が繰り広げられ、高揚感あふれる幕切れを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1838～44年／初演：1845年3月13日、ライブツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー

交響曲 第4番 へ短調 作品36

作曲家が作曲だけで生計を立てるのは容易ではない。多くは作曲活動のかたわら、演奏家として舞台に立ったり、教職を務めているもの。ところがロシアのピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は巨万の富を有するパトロンのおかげで作曲活動に専念する幸運を手に入れた。

鉄道王の夫より多額の財産を相続した音楽愛好家ナジェージュダ・フォン・メックは、まずは編曲の仕事を通じてチャイコフスキーを支援した。1877年、チャイコフスキーはメック夫人に借金を申し込み、これから書く交響曲を捧げたいと提案する。しかし、メック夫人は金銭を渡しても返済は断った。借金を負わせるのは偉大な才能にふさわしくないと考えたのだろう。以後、無償の援助が続けられ、チャイコフスキーは創作活動に打ち込む自由を手に入れた。こうして書きあげられた交響曲第4番はメック夫人に献呈され、78年に初演された。奇妙なことに、二人は生涯に700通以上もの手紙を交わし、特別な友情と信頼関係を育みながら、直接会おうとはしなかった。対面することで互いの関係性に変化が起きることを嫌ったのだろうか。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート～モデラート・コン・アニマ 冒頭のホルンとファゴットによる決然としたファンファーレは、作曲者によれば「運命。幸福の実現を妨げる不吉な力」。序奏に続いて弦楽器が暗鬱な主題を奏で、緊迫感あふれる楽想が展開される。

第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ オーボエによる物悲しい旋律で開始される。中間部で一筋の光が差し込むが、ふたたび冒頭主題が帰り、打ちひしがれたようなムードが支配する。

第3楽章 スケルツォ：ピッツィカート・オスティナート、アレグロ 弦楽器によるピッツィカート（弦をはじく奏法）が特徴的。気まぐれでユーモラス。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・コン・フォーコ シンバルの一撃とともに盛大に開始され、ロシア民謡由来の主題を交えながら熱狂的なフィナーレを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1877～78年1月／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

4/26

土曜マチネー

4/27

日曜マチネー

Program Notes